

5. 飛鳥寺および周辺地の調査

飛鳥寺およびその周辺では、今年度、4ヶ所において調査を行なった。ここでは、そのうち、寺域東北隅を検出したA調査地、寺域南の石敷広場を検出したB調査地、および、寺域西限の近くで行なったC調査地について報告する。各々の調査地点の位置については、11ページに掲げた調査位置図によられたい。

A. 飛鳥寺東北隅の調査

(昭和57年5月～12月)

日本最古の本格的寺院である飛鳥寺は、昭和31～33年の当研究所による発掘調査によって、一塔三金堂からなる朝鮮直輸入の伽藍配置をもつことが明らかになった。また、この調査では、南門・西門跡が確認され、現存地割などから、中心伽藍の中軸線を西3分の1に置き、南門の南の石敷広場北端を南限とする方2町(約210m四方)の寺域が想定された。ところが、昭和52年に至って、飛鳥寺安居院の北方約220mの地点で、東西塀SA500とその北3mにある幅約2.4mの外濠SD501、SA500の南約9mの位置にある内濠SD503などが検出され、これらが一体となって飛鳥寺の北を画していたことが判明した(概報8)。南門南の石敷広場北端から東西塀SA500までの距離は約324mで、飛鳥寺の寺域は従来の推定よりも北へ1町分広く、南北3町とするのが妥当であるとみられるに至った。

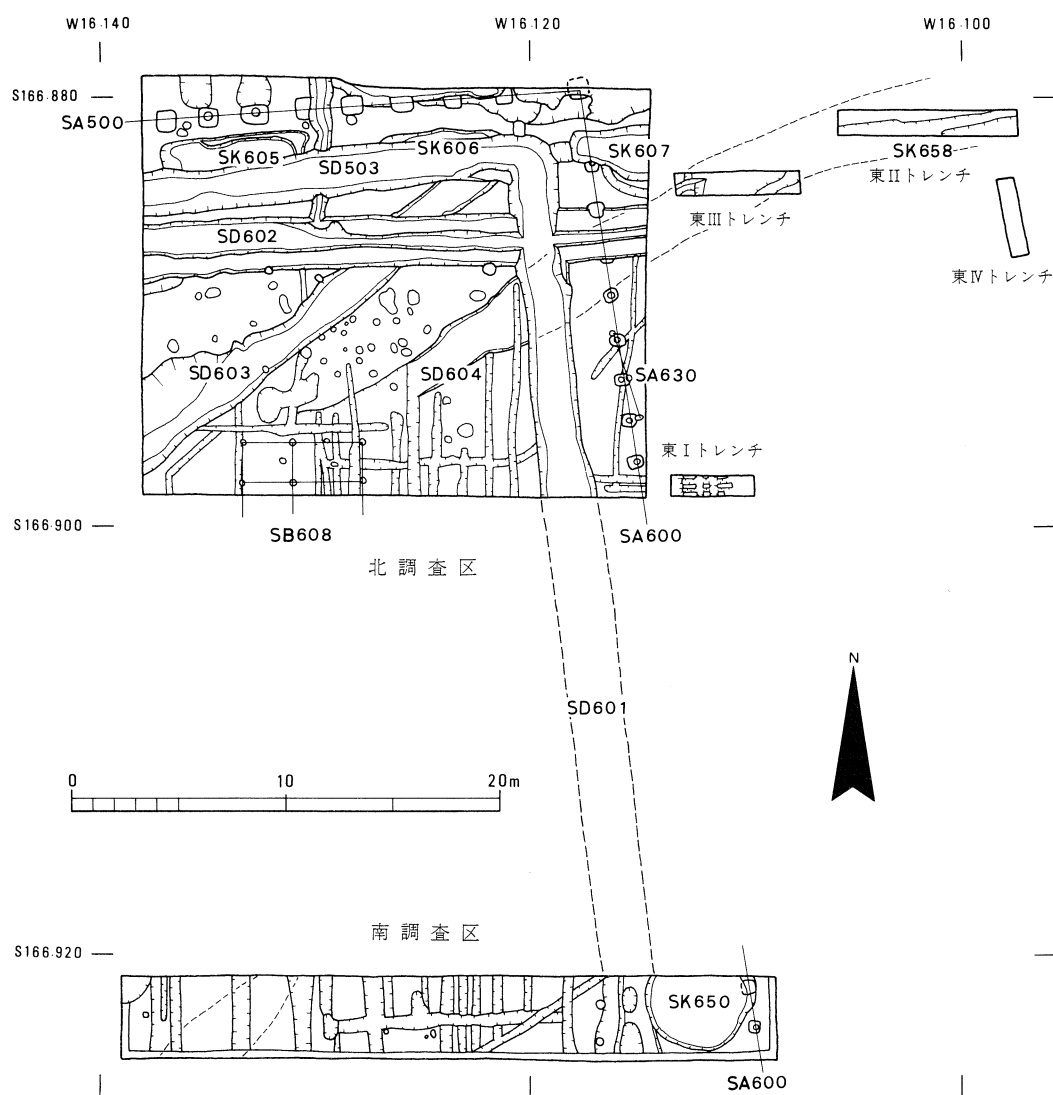
今回の調査は、昭和52年調査地の東約100mに位置する水田を対象として実施したもので、飛鳥寺寺域を東西2町とした場合の寺域東北隅は、調査地水田の北半で検出されるものと想定した。そこで、調査は南北に長い水田の北半に北調査区を、南端に南調査区を設定し、寺域東北隅および東限の施設の確認を主たる目的として実施した。さらに、北調査区の東にもいくつかの小トレンチを設けて、寺域東方の遺構の検出につとめた。

遺構 北調査区での基本層序は、上から耕土・床土・褐色土・灰褐色砂質土・暗褐色砂質土・灰褐色粘質土・茶灰色土の順で下層におよび、灰褐色粘質土層までは中世の遺物を含んでいる。各層ごとで遺構検出を行なったが、ここではその下の黄褐色粘質土層と暗褐色粘質土層の上面で検出した遺構について述べる。遺構検出面

は東南から西北に向かって緩やかに下降し、その両端での比高は約50cmほどである。

北調査区において検出した主な遺構には、東西塀SA500、南北塀SA600、東西溝SD503、南北溝SD601、東西溝SD602、土壌SK605・606・607、掘立柱建物SB608、南北塀SA630、斜行溝SD603・604などがある。

東西塀SA500は調査区の北端で検出したもので、西端から9間目で南折し、南北塀SA600に連続する。東北部の柱穴は、中世における八釣川の氾濫によって、一部削り取られている。柱掘形の大きさは0.8～1m内外で、柱間寸法は2.2m等



第9図 A調査地（寺域東北隅）遺構配置図（1：350）

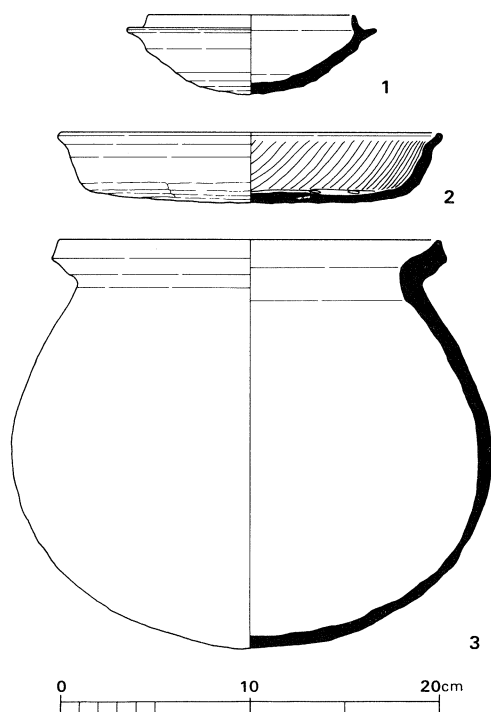
間である。ただし、東端の1間分だけは3.5 mと広がっている。塀の軸線は国土方眼方位に対して、東で北へ約4°振れている。

南北塀SA 600は、北調査区の東端で9間分を検出した。柱掘形は、一辺0.5～0.8 mのやや不整形な平面形で、柱間寸法は、北端の1間分だけが3.5 mと広がっているほかは、2.0 m等間である。この塀の軸線は国土方眼に対して、北で西へ約8°振れている。したがって、SA 500とSA 600とは正しくは直角にならない。

東西溝SD 503はSA 500の南にあり、その北肩はSA 500から約2 mの位置にある。SA 500と併行してのびており、東ではSA 600にそって南へ折れ、南北溝SD 601に連なる。幅2.0～2.3 m、深さ0.5～0.6 mの素掘りの溝で、溝内には多量の流水のあった形跡はない。堆積土からは、6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯身片（第10図1）、赤焼きの桶巻き作り平瓦片が少量出土した。

南北溝SD 601はSD 503とほぼ同規模の素掘り溝で、その東肩はSA 600の西1.6～2.0 mの位置にあり、南下するに従ってSA 600から離れる傾向にある。

東西溝SD 602は、SD 503の南にある幅2.3～2.6 m、深さ0.5 mの素掘りの



第10図 A調査地出土土器
(1: SD 503, 2: SK 606, 3: SB 608)

溝で、部分的に二段掘りになっている。軸線は国土方眼に対し東で北へ約2°振れている。流水があった形跡はみられず、溝内の堆積土から赤焼きの瓦片が少量出土した。重複関係からみて、南北塀SA 600・南北溝SD 601よりも新しいことがわかる。

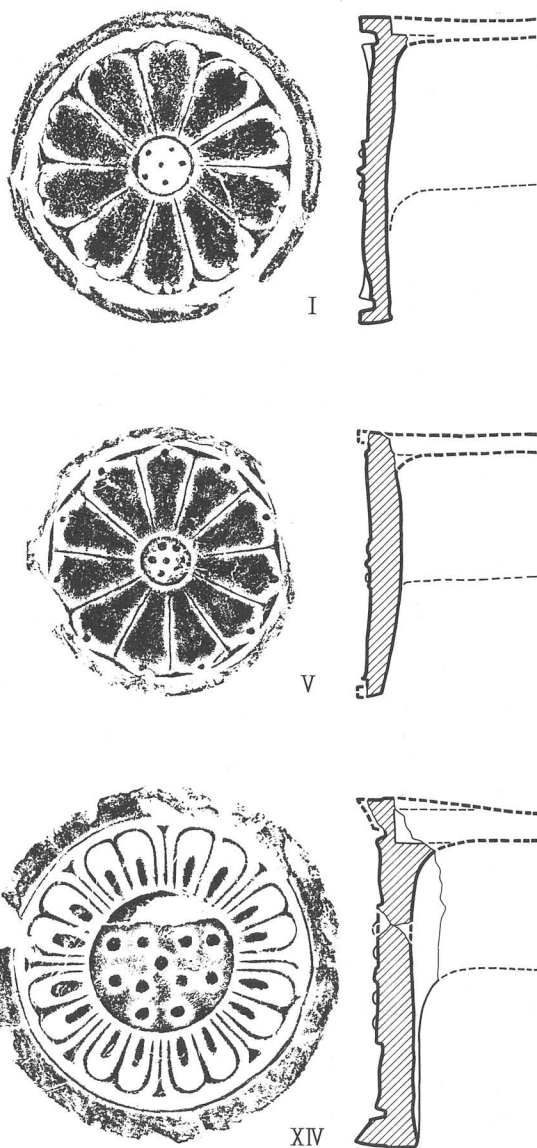
土壙SK 605・606・607はSA 500の南約1 mの所に東西に並ぶ瓦溜で、それぞれ、東西6 m、南北3 mほどの不整形な平面形を呈する。埋土からは飛鳥寺創建時の単弁蓮華文軒丸瓦や7世紀後半期の複弁蓮華文軒丸瓦（第11図）のほか、縄叩き目をもつ一枚作りの平瓦片や8世紀中頃の土器（第10図2）などが出土した。SK 605と

SK 606はその南半が東西溝SD 503と重複し、その廃絶後に掘られたものである。SK 605の瓦片がSK 606出土のものと接合することなどから、これらの瓦溜は、一連の作業で掘られた可能性が強いと考えられる。

掘立柱建物SB 608は、北調査区の南端で検出した総柱の建物で、その柱掘形から10世紀頃の土師器甕（第10図3）が出土した。SA 630は南北塀SA 600と重複して建てられた南北2間の掘立柱塀であるが、あるいは東へ延びて掘立柱建物にまとまるのかもしれない。SA 600よりも新しくつくられ、柱掘形も小さいことから、古代末～中世に属する建物であろう。

調査区を西南から東北にかけて横切っている斜行溝SD 603・604はいずれもSA 500・600，SD 503・601に先行する自然流路である。西側にあるSD 603の堆積土から古墳時代の土器片が少量出土した。

北調査区の南約22mに設けた南調査区での基本層序は、上から耕土・床土・灰褐色砂質土・暗褐色砂質土・茶灰色土・黄色粘土混り暗褐色粘質土で、暗褐色砂質土層より上層では瓦器片などを含んでいる。ここでは、その下の黄褐色粘質土上面で検出した遺構について述べる。検出した主な遺構には、南北塀SA 600，南北溝SD 601，土塀SK 650などがある。



第11図 A調査地出土軒瓦（1：4）

南北塀 S A 600 は柱掘形 2 個を検出した。北調査区で検出した S A 600 の南延長線とは若干のズレがあるものの、柱間寸法は約 2.0 m で、柱掘形の大きさや軸線の方位もほぼ等しいので、北調査区の S A 600 と一体のものと考えられる。

南北溝 S D 601 は、北調査区の S D 601 の南延長線上にあるが、その東半を土壌 S K 650 によって破壊されている。溝内堆積土から藤原宮期の土器が出土した。

土壌 S K 650 は南北塀 S A 600、南北溝 S D 601 の廃絶後に掘られたものである。埋土には多量の灰・焼土とともに、焼け歪んだ丸瓦片や、瓦片が熔着した窯壁片などが含まれており、付近に瓦窯の存在が想定できる。共伴する瓦片には、飛鳥寺創建時のものから、奈良時代に属する縄叩き目をもつ一枚作りの平瓦片まで各種のものが含まれている。

以上の北・南調査区の遺構検出後に、北調査区の東で南北塀 S A 600 に対する東外濠の存否を確かめるために東Ⅰ・Ⅲトレンチを、東方で遺構のひろがりを知るために東Ⅱトレンチを、東西溝 S D 602 の延長部を確かめるために東Ⅳトレンチを設定した。東Ⅰ・Ⅲトレンチでは、東外濠に相当する溝は検出されなかった。前調査区北辺で検出された北外濠 S D 501 は南折せずに、そのまま東へ延びている可能性がある。東Ⅱ・Ⅲトレンチでは、斜行溝 S D 604 の延長部分を検出した。また、東Ⅱトレンチでは、S D 604 の埋土の上で、瓦溜 S K 658 を検出した。S K 658 は、その北端を確認したにとどまるが、他の瓦溜と同じく、東西に長いものと思われる。こうした瓦溜が、寺域東限施設の東外方にもつくられていることは注目されよう。東Ⅳトレンチには、厚い粘土の堆積層が認められ、東西溝 S D 602 の東延長部は検出されなかった。堆積した粘土層は北調査区東北隅でみられた中世の氾濫によるものと近似しており、S D 602 はすでに流失したものとみられる。

遺物 土壌 S K 605・606・607・658・650 などから多量の瓦が出土した。上層出土のものを含めると、出土した軒瓦は第 1 表のようになる。これらの軒瓦は床土から出土した平城宮 6308 系の軒丸瓦を除くと、これまでに飛鳥寺の中心伽

型 式		点数
軒 丸 瓦	I	29
	V	3
	VII	1
	XIV	17
	XVI	3
	6308 系	1
計		54
軒 平 瓦	6661-B (大官大 寺式)	2
	四重弧文	2
計		4

第 1 表 出土軒瓦一覧
(型式不明は除く)

藍から出土した軒瓦とまったく共通した特徴をもつものである。土器類では、遺構の説明に際してふれたもののほか、円面硯が1点出土したのが注目される。

まとめ 今回の調査で検出した東西溝SD503は、昭和52年の調査で検出した寺域北限を画する内濠の東延長上に位置している。また、東西塀SA500についても、北限を画する塀の東延長上にはほぼ位置している。SA500に関しては、前回の調査区に比べて方位の振れが大きく、柱間寸法にも相違があって、両者の接続状況についてはなお検討を要するが、飛鳥寺寺域北限を画する一連の施設とみるのが妥当と思われる。

東西塀SA500、および東西溝SD503は、南折してSA600、SD601に連なる。これらは寺域東限を画する施設と考えられる。飛鳥寺北西隅の推定位置から、今回検出した東西塀SA500と南北塀SA600との交点までの距離は213mで、南北324m（3町）に対してほぼ2町分に当たる。

東西塀SA500と南北塀SA600とは、柱間寸法や柱掘形の大きさが若干異なり、また、交叉角度も約94°とやや鈍角をなしている。同様に東西溝SD503と南北溝SD601との交叉角度もやや鈍角気味である。これらは一体となって飛鳥寺の東北角を画していたものと考えられるが、各々の遺構は必ずしも同一規格で施工されておらず、地割のための測量も含めて、工事が伽藍中枢部でのそれに比して、やや粗雑であったものと思われる。

これらの遺構の築造年代とその存続期間については、SD503出土の土器や瓦から、飛鳥寺創建時まで遡ることは明らかである。また、その廃絶は内濠SD503やSD601の埋土上に瓦溜が掘られた8世紀よりも前であり、南調査区のSD601から出土した藤原宮期の土器は、その存続年代の一端を示すものである。これら諸施設の廃絶後、北内濠SD503の南に、東西溝SD602が設けられている。この溝の年代や東部での状況は明らかなでないが、SD503をほぼ踏襲した位置と方向をもっており、SD503の改削である可能性がある。また、昭和54年に行なった飛鳥寺東南部の調査では、南面築地が8世紀初頭に改作されていることを明らかにしたが、その他、各所で奈良時代の土壌・瓦溜を検出しており、今後、飛鳥寺の調査は、創建以後の寺地の改変という観点からも進めていく必要がある。

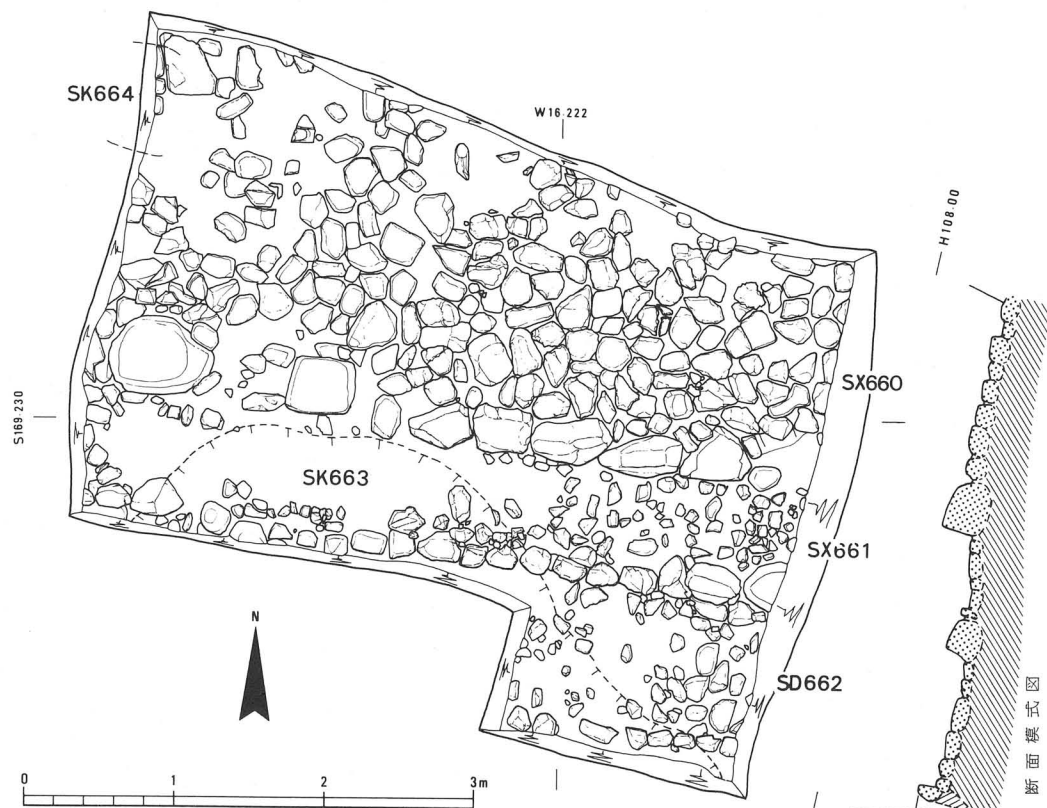
B. 南方石敷広場の調査

(昭和57年9月～10月)

調査地は、飛鳥大仏の東南約140 mの水田で、昭和31年に南門の南で検出した石敷広場の東方約40 mに位置する。調査地の層序は、耕土・床土・暗茶褐色砂質土・暗褐色土である。暗褐色土層上面で石敷・石組溝を検出し、それらの下層で土壌2基を確認した。したがって、遺構は上層(Ⅱ期)と下層(Ⅰ期)とに大別される。

Ⅰ期の遺構 調査区南半に広がる土壌SK663と、調査区西北の土壌SK664とがある。SK663は東西4 m、南北2 m以上の規模をもつ土壌で、その北半を確認した。埋土からは、多量の瓦類とともに、鉄滓・炭化物および垂球形土製品が出土した。瓦類はいずれも黄褐色を呈する薄手の丸・平瓦で、7世紀前半代に位置づけられる。土壌SK664は、その一部を確認しただけで、規模・形状は不明である。

Ⅱ期の遺構 石敷SX660・661、石組溝SD662がある(写真9)。いずれも西で北へ約8°の振れをもって構築されており、一連の造作によるものである。調査



第12図 B調査地(石敷広場)遺構配置図(1:50)

区北半の石敷 S X 660 は、約30 cm 大の河原石を敷きつめた遺構で、南端には幅50 cm のひとまわり大型の石を、南に面をそろえて並べて縁石としている。南北 2.5 m 分を検出した。S X 660 の縁石の南には、一段（約15 cm）低く石敷 S X 661 が築かれている。S X 661 は、やや小ぶりの石を使った石敷面とその南の縁石とからなり、その南北幅は約79 cm である。この S X 661 の縁石の南約90 cm には、約15 cm 大の扁平な河原石が、北に面をそろえて並べてあり、その間が石組溝 S D 662 となっている。S D 662 は、深さ約10～15 cm で、底には約15 cm 大の河原石を敷いている。これらの遺構は、それぞれの南と北とではほぼ水平であるのに対して、東西では、西方が低く、石組溝 S D 662 は西流していたものと思われる。石組溝埋土および石敷上面から、土器・瓦片が出土したが、いずれも細片で、時期を決するには至らなかった。

まとめ 今回検出した石敷・石組溝は、昭和31年に検出した飛鳥寺南門南の石敷広場とほぼ同じ方位と傾斜とをもち、特に石敷 S X 660 は、その用材・構造ともに石敷広場のそれと酷似するなど、これらが一連の遺構である可能性が高い。南門南の石敷広場は、北に面をそろえた縁石で区切られた石敷であり、今回検出した遺構と一連のものであるとすれば、その構造は、南北両端を縁石で区切る低い基壇状の石敷で、南に幅狭い石敷と浅い石組溝を伴うことになる。その場合の規模は、石敷広場の北縁から S X 660 南縁までで、南北約20.5 m であり、S D 662 南側石まで含めると約22.2 m となる。また、東西長は約66.6 m 以上におよぶことになる。

石敷・石組溝の築造年代については、下層の土壌 S K 663 出土の瓦が飛鳥寺の創建時までには遡りえず7世紀前半代に位置づけられるものであることから、7世紀中頃以降と推定される。昭和54年調査などでも、石敷広場と同じ方位の振れをもった遺構（木樋・石敷など）が検出されており、それらは7世紀前半から中頃の遺構とみられる。今回検出したⅡ期の遺構は、それらと密接な関連をもち、飛鳥寺南方に現存する斜行地割内に営まれた遺構の一画をなすものであろう。

石敷広場の性格については、その構造から、道路あるいは回廊などの建物基壇とみることもできようが、なお明らかでない。また、飛鳥寺が真北をさして建立された後に、斜行する遺構が営まれた理由についても、自然地形や飛鳥寺創建以前の地割によるとする従前の推定をこえる知見は見あたらない。今後の調査をまちたい。

C. 寺域西限付近の調査

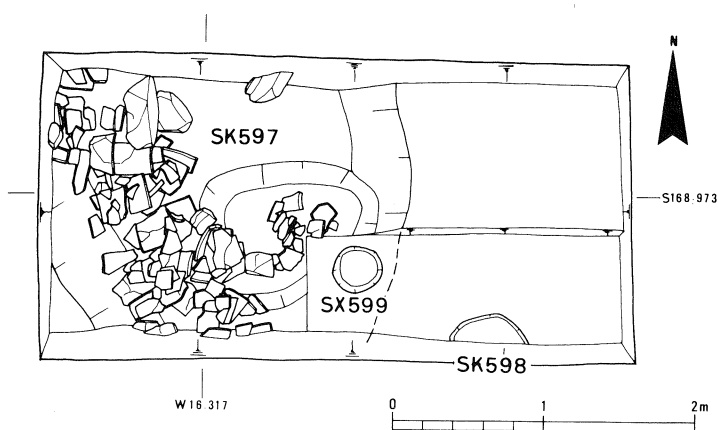
(昭和57年5月)

調査地は、飛鳥寺の寺域（南北3町）の北3分の1に近く、西限推定線から約10m内側にあたる民家の敷地内である。調査地の層序は、表土・灰褐色砂質土・暗灰褐色粘質土・暗褐色土・暗褐色粘土・黒褐色粘土・黄褐色粘土混り黒褐色粘土・黄灰色砂質粘土（地山）層となっている。第3層目の暗灰褐色粘質土層までは、近世の陶器片が含まれており、近世以降の生活面とその整地土層と理解される。また、黒褐色粘土層以下は、飛鳥寺創建以前の土層である。

遺構 暗褐色粘土層上面の土壇SK597、黒褐色粘土層上面の土壇SK598および同層下面から掘られた小柱穴SX599がある。

土壇SK597は、調査区の西半を占める東西約2.6m、南北2m以上の南北に長い土壇であり、底はゆるやかな摺鉢状をなし、深さは約35cmほどである。土壇西半には、その縁辺にそって、多量の瓦類が折り重なった状況で遺存し、東半には、底に密着して土師器杯・甕などが遺存した。瓦類は後述する如く、特色ある一群であり、土器類は7世紀中葉から後半のものが主体であるものの、奈良時代前半に属する土器が少量含まれている。土壇SK598は、掘削面がSK597よりも一層下であり、古い土壇であることがわかるが、一部確認しただけで規模は不明である。埋土には瓦片や炭化物が含まれている。

以上の遺構の基層をなす黒褐色粘土層・黄褐色粘土混り黒褐色粘土層には、5世紀後半の土器が含まれており、両層の間には厚さ2cmほどの炭化物を含む間層がみ



第13図 C調査地遺構配置図（1：50）

られ、製塩土器、土師器碗・壺などが出土した。小柱穴SX599は、この間層から掘り込まれており、直径30cmの円形を呈する。埋土からは製塩土器が出土した。柱穴は、間層を床面とする5世紀末頃の竪穴住居に伴う

ものである可能性が強い。

遺物 土壙 S K 597 出土の多量の瓦類は、その出土状況とともに、遺構の性格を示唆する内容をもつものであり、少し詳しくふれておきたい。瓦類は、複弁蓮華文軒丸瓦（飛鳥寺 XIV 型式）2 点、隅切平瓦 1 点のほか、丸・平瓦 200 点以上が出土した。それらのなかで丸・平瓦はその 80% 以上が製作技法・胎土の共通する特色ある一群で占められている。この一群の瓦は、桶巻作りで、大部分の凹面には粘土板糸切り痕跡がある。平瓦はすべて凸面を粗くナデ調整したのちに、格子目叩きを施している。格子目叩き原体の種類は、すべてを通じて三種に限定されており、同一個体に二種ずつ組合わされた例も少なくない。丸瓦は、いずれも玉縁をつくらない行基葺きで、胎土・焼成とも平瓦のそれと同じであって、凸面にヨコ方向のナデ調整を残す点が特徴的である。この丸瓦には、飛鳥寺 XIV 型式の瓦当がつく例があり、この一群の瓦類が、飛鳥寺改作時（7 世紀後半代）につくられたことを示している。

以上のように、土壙出土の瓦類は、非常に単純な組合せをもつものであり、いずれも完形あるいはそれに近い姿で折り重なって出土したことを考え合わせれば、土壙付近に存在した建物の廃絶時に一括して投棄されたものとみられる。その建物は飛鳥寺 XIV 型式の時期に新宮あるいは全面的な改修を受けた建物であって、またその存続年代が長期にわたるとは考えがたいものである。伴出した土器類に、奈良時代前半のものが少量含まれることは、これらの推定と矛盾するものではない。

まとめ 今回検出した土壙 S K 597 は、その位置から、西限施設の廃絶時に伴う瓦溜とも解された。しかし、外郭施設は、本年 A 調査地などの所見では、創建時に造営され、奈良時代前半代には廃絶したことが明らかになっており、土壙出土瓦類の大半が、飛鳥寺改作時（7 世紀後半代）とそれに伴う丸・平瓦で占められている点と矛盾するものである。この土壙は、外郭施設の廃絶時よりも前に建てられた建物がこの付近に存在し、建物は 8 世紀前半代には廃絶したことを示している。昭和 52 年に、本調査地の東で行なった小規模な調査でも、奈良時代中頃の土器を多く含む土壙を検出しており、奈良時代における飛鳥寺の変容が、大規模かつ広範囲にわたるものであったことが窺われる。奈良時代以後の改変の実態と意義については、これらの資料の再検討を含めて、今後の調査・研究にゆだねたい。